14.5
30
14. 5-30
1200501212054

燉煌出土古寫佛典に就いて

ミヤ、吹慶輝著

十四回

始

第十四回講演集（昭和七年五月三日）

文學博士　矢吹慶輝講演

燉煌出土古寫佛典に就いて

財團法人　啓明會

目次

開會の辭……一
燉煌出土古寫佛典に就いて……三
第一（未傳古逸を主として）
一　經疏部……（一〇）
二　戒律部……（三一）
三　論疏部……（三四）
四　雜經疑僞部……（四二）
五　史傳禮讃雜部……（五一）
第二（古經稀覯を主として）
一　古經題跋……（五九）
二　古寫稀覯……（六五）
別室出陳
三　三階教籍……（六九）
四　摩尼教籍……（七二）
附錄　本會寄附行爲、職員名簿、出版目錄……一

14.5-30

財團法人 啓明會第十四回講演集（大正十四年四月十九日 東洋文庫に於て）

開會の辭

本會理事　山之内一次君

開會に際して一言御挨拶申上げます。本日我が啓明會が展覽會及び講演會を開催致しました處、多數の方々が御來會下さいまして厚く御禮申上げます。別室に陳列致してあります燉煌出土古寫本ロートグラフは、矢吹慶輝博士が多年非常なる御苦心を以て撮影將來せられ、頻りと研究を進められてゐる所のものであります。これを倫敦のブリチッシ　ミユヂヤム所藏の原本に就いて撮影せられるに就ては、態々彼の地に出張して多大の努力をせられたのであります。この事業には本會は聊か財的に御援助申上げた關係にあるので、かゝる貴重なる資料を此のやうに多數に蒐集

發行所 東洋文庫本
昭和七年 帝國圖書館藏

整理せられ、これに就いて折角研究を進められ、色々と御盡力になつた同博士に對して改めて深甚の謝意を表するものであります。只今から、こゝに掲げました演題の下に、この古寫佛典の內容、價値等に就いて御講演を願ふことに致しますから御清聽を願ひます。尙本日の展覽講演會に就いて會場等格別の御配慮に預りました東洋文庫に對して厚く御禮申上げます。

燉煌出土古寫佛典に就いて

矢吹慶輝君

私は大正八年以來、財團法人啓明會の御補助によりまして、サー・オーレル・スタインが燉煌千佛洞で蒐集した珍らしい寫本を寫眞に撮る計畫をたて、大正十一年には又啓明會からの援助で再び英國に赴きまして寫本の再調査と共に白寫眞撮影を進めて、出陳目錄にも書いて置きました通り、大正十四年一月迄に大體豫定の計畫を完成しました。白寫眞は大小兩形を合せますと六千數十葉となり一葉大略一尺として全部を列べると二十餘丁の長さに達することになりました。

スタイン氏が燉煌石窟で蒐集された出土寫本は八九千點にも達するが、私はこの中、先づ佛敎關係の文書で、主として一切經卽ち漢語佛典たる正續藏經中にある約二萬卷ばかりの中に收められてゐないものを寫眞に撮つて研究資料としやうとしたもので、更に詳しく云ふと、(1)未だ曾て世に傳へられなかつた未傳のものと、(2)古

記錄にその書名があつても今日散逸して傳はらないものと、(3)既に傳へられて居るものでも古い寫本で文句の異つてゐるものと、(4)及び稀覯の文献とを、勿論英國博物館の許諾の下に、寫眞に撮らうとしたのであります。拙著、三階敎之研究の如きも、今日別室に出陳してあります燉煌出土寫本によりてその研究の端緒を得たわけでありますから、かうした未傳稀覯の寫本類は種々な方面から重要な研究資料であるのであります。尤も普通に行はれてゐるものでも珍しい古寫經類も寫眞に撮ることに致しました。ロンドンの東洋學校長のデニソン・ロス氏が、英國博物館で古寫本を調査してゐた時、偶然訪ねられて世間の人は芝居や活動を面白がつてゐるが、古文書の斷簡を通じて古代の歴史を想像し得ることは、學徒に取ての此上なき樂みだといふやうなことを語られたことを記憶してをりますが、この數多の寫本の中にはそうした興味をそそるものも決して鮮くはないのであります。但し私は佛敎文書でしかも英國博物館の許諾を得たものだけを寫眞に撮つたので、調査の際に手寫した分は今日出陳してありません。

私が初めてスタイン博士に會つたのは、千九百十六年六月五日で、同博士が第三

回の中央亞細亞學術探檢の旅行を終へてロンドンの王立地學協會でその調査報告をされた時でありました。スタイン博士は千八百九十八年以來中央亞細亞學術探檢の計畫を立てられ、その第一回旅行(一九〇〇年—一九〇一年)では于闐を中心として支那土耳其斯坦を。第二回旅行(一九〇六年—一九〇八年)では鄯善、燉煌、古長城の邊を。更に第三回旅行(一九一三年—一九一六年)では庫車、高昌(吐魯蕃)、玉門地方を調査されて、毎回莫大なる重要資料を蒐集されたが、特に本日の出陳に關係あるのは、この内の第二回旅行の時の收獲からであります。燉煌の千佛洞で、偶然、永い間秘められた豐富な古寫本や古文献を獲られ、それが英國博物館に將來された。その一部がここに寫眞として出陳されたわけであります。

中央亞細亞の學術探檢熱は前世紀末から各國の東洋研究者の間に起り出してゐたので、ドイツのル・コク氏、ロシヤのオルデンブルグ氏、日本の大谷伯派遣なども各々有益な調査と蒐集とを果されたが、燉煌千佛洞の古寫本蒐集といふ點では、千九百〇七年のスタイン氏蒐集の翌年、千九百〇八年に佛國學士院の特派によつてペリオ氏が同じくこの地で夥しき文書を蒐集されました。それは現に巴里の國民圖書館

に藏せられて居ります。

スタイン氏の蒐集品には寫本ばかりでなく美術品特に繪畫だけでも二百點もあり、其内の重要なものは瀧精一博士の御計畫で啓明會の援助の下にその摹寫が出來たことは御存知のことと思ひます。又日本の當麻曼陀羅との關係に大切な參考品である觀經變相だけでも仲々多いのであります。その中、寫本だけについて見ても、言語、歴史、宗教などの各方面に亘つての貴重な研究資料に富んでゐるのであります。スタイン博士がその第二回旅行の成果を纒めた著書にSerindiaといふ名をつけたが、これはギリシヤ古代のプロコピウスの用語を使つたので、西方の文化を含めて印度と支那との諸文化の混合した地點といふ意味を表はしたのであります。寫本の中には佛教や道教や儒教關係は勿論、摩尼教(別室出陳)や景教の文書もあり、言語や文字の上からすると漢語、梵語、伊蘭語、シリア語、土耳古語、西夏や西藏文字の外、死語である龜茲語や于闐語もあるといふ風で、東洋學の立場からは何れも貴重なものであり、研究上では各方面の學者の協力を要するものであります。併し最も多いのは寺の所藏であつただけ漢語の佛教教籍であります。刊本藏經でも古いのは珍しい

のでありますから、まして寫本藏經としてあれだけ豐富なものは今まで知られた處では恐らくその右に出づるものがなからうと思はれます。

日本佛教の研究には一般に支那佛教の研究が必要であり、大化改新前後から淀河と楊子江邊とを船で繫ぐ以前の佛教研究には、實に三韓佛教の研究が必要であるやうに、支那初期佛教の研究には西域佛教の研究が必要であります。高僧傳に「方等の深經は蘊めて葱外に在り」といひ、「形を亡して道に殉じ、命を棄てて法を弘めた」人の續出したのも、この西域佛教の關係からであつたのであります。そして燉煌は(1)西域地方と支那本土とを結び付ける交通要路いはば文化接觸の關門であつたので、(2)一時はこの地方が佛教の中心地たる觀すらあつたのであります。從つて(3)月支人の後裔で燉煌の出身で、西域三十六種の異つた言語に通じてゐた支菩薩、又は燉煌菩薩即ち西晋の竺法護や、燉煌人であつた淨影の慧遠などは勿論、于道邃や明律の法頴なども燉煌の出身で、竺法乘も燉煌關係の高僧であり、曇無讖なども暫時この地に逗留をしてゐたのであります。(4)佛教が初めてこの地に入つた年代は判然しないが支那本土より早かつたことは確かで、(5)從つて又この地方には古くから石窟佛寺が

あつて早い所では第四世紀の上半期から出來てゐて唐代には窟屋一千餘といはれ、千佛洞、千佛巖、莫高窟などといはれて居ました。從つて佛像壁畫寫經などが夥しくその地に存在し又集められてゐたのであります。その上(6)石窟はその風土が古寫本保存にはまことに適當な土地であつたのであります。

燉煌は現今の甘肅省安肅道に屬し縣治の所在地で、千佛洞はその燉煌の東南十五粁の地、鳴沙山麓にある石窟であります。瓜の名產地であつたので春秋時代には瓜州といひ、漢の頃から燉煌といひ、それから沙州などともいつたりして時代で地名が變つてをりますが、古くは月支人が居たこともあり西凉の都であつたこともあり唐代には吐蕃(西藏)人が侵入したし、後、一時西夏の屬領となつたこともあるから、燉煌は實に複雜な文化を織り込んだ歷史を有つてゐるのであります。

さて千佛洞の石窟內に秘藏された古寫本は清朝の光緒十一年(一八八五年)に偶然に發見されたもので、西洋人で最初に蒐集したのがスタイン氏で、その顚末は詳細な同氏の報告があります。次がペリオ氏で、この當時貴重古寫本を國外に賣つたといふ廉で王道士は死刑に處せられ、北京政府は殘りの寫本を全部京師圖書館に持つて

來ることにしたのであります。そしてこの古寫本が石窟內に密閉されたのが、宋の眞宗(九九八——一〇二二)の時であつたか、又は宋の仁宗の景祐二年(一〇三五)に吐番人の侵略を免れるために寺僧が窟內に隱したものかはどちらにしても、私がスタインの寫本調査の際、十二世紀以後の年號を見なかつたから、大體宋初以來秘藏されたことは確かで、二十世紀初めまで九百年間も知られずにゐたのであります。仕舞込まれた年代は古いしそして寫本が多いのですから、先づこの夥しい寫本には屹度珍しいものがあるだらうと考へられる次第なのであります。

大正八年六月以來、特に大正十一年十一月に再び英國に往つて再調査に從事することとなりました前後に於いて、啓明會からは經濟的方面は固より精神的にも深い御援助を辱うしたのでありまして、今かうした展覽會が開かれますこととなりましたに對し、衷心感謝に堪へぬ次第であります。

これから出陳寫本に就いて申上げますが、前申しました通り、燉煌石窟からの出土本は、英國博物館と巴里國民圖書館と京師圖書館とに散在して居り、又日本にも可なり來て居りますので、出土本の研究はそれ等の全部を調査する必要があるわけ

であります。御話の便宜上、この英國博物館所藏をスタイン本と略稱し、巴里國民圖書館本をペリオ本と略稱することにします。しかし出陳の白寫眞は英國博物館所藏だけで、それも同博物館東洋部支那主任のジャイルス博士が撮影を承諾されたものの内で、經費の許す限り撮つたもののみであります。尤も佛教關係の未傳古逸といふ點からは大體重要なものは網羅してゐる積りです。撮影しなかつたもので手寫したのがありますが、前にも申ました通りそれは出陳しませんでした。序でに申し添へて置き度いのは、スタイン氏の第三回旅行で獲られた古寫本は、數量は少いが斷簡や殘卷でない完本が多いのでありますから、他日補足される點があるといふことであります。

それではこれから重要寫本の寫眞に就いて簡單に說明致します。先づ始めに多少の除外例はありますが、未傳古逸の部から始めます(各項目の下、括弧内の、番號は拙編、鳴沙餘韻の順序を後から挿入したもの)。

一、經疏部 一—二〇九

參考のため第七回展覽會目錄番號を擧ぐ以下之に準ず

華嚴經章(失題)

覺賢譯の華嚴經三十四品の品毎に、その大意(來意)を略釋したもので(初二品闕)、各品の題號が概ね簡古であること、第二十品の品目を略してゐること、終りに四弘誓文を擧げてゐるが、普通の四弘誓願とその順序を異にして、第一願が斷で第二願が修で第三願が度で第四願が成となつてゐることなどが特に注意を惹く點である。

(1-I)

十地義疏(失題)

十地義疏(失題)はスタイン本中他にも一本あり。ペリオ本には「十地義記卷第一」の外に保定五年(五六五)の「十地義疏卷第三」がある。地論宗研究の一資料である。

(1-II)

華嚴略疏卷第三

首題に「華嚴略疏卷第三　十地品初訖」とあり、尾題に「歡喜地竟　略疏第三」とある通り、華嚴經十地品の初地を注釋したもので、解釋も筆體も俱に古風で、前述の華嚴章と合せて華嚴經の六朝古逸章疏である。

(2-I)

楞伽經疏卷第四

「中大雲寺沙門圓暉述」とあるのと、この寫本は普通の卷子本と異つて厚紙を切りて

(3)

具葉綴葉風にした點と、更に楞伽經の本文に西藏譯の原文を對照した點とが珍しい點である。華嚴經章以下の四寫本に就いては種々の點から寫本の價値を述ぶべきだが姑らく他篇に讓ることにする。次にスタイン本には維摩經卽ち淨名經に關する章疏類の殘卷斷篇が仲々澤山あるが

維摩義記　景明原年二月廿二日比丘曇興於定州豐樂寺寫訖　(4,5,6-I)

の奥書を有する寫本は、北魏景明元年(五〇〇)の筆寫にかゝり、現存の維摩疏中で北魏以前に屬するものとしては唯だ僧肇の注維摩だけだから、肇注に次ぐ維摩の古疏で勿論肇注を初め現存諸疏とは符合しないから未傳の古佚疏である。それから

維摩義記卷第四　大統五年四月十二日比丘惠龍寫記流通　保定二年歲次壬午於爾錦公齋上楡樹下大聽僧雅講維摩經一遍私記　(6-I)

の奥書を有つてゐる。卽ち西魏文帝の大統五年(五三九)と北周武帝の保定二年(五六二)との經記を有つ維摩疏で、古い處では義記と名のつくものに燉煌出身の慧遠(開皇十二年、五九二年七十才寂)の維摩義記八卷があるが、それではない。その上第四卷末の引用經文を什譯と對照しただけでも現流本とは文字の出入が可なり多い。兎に角

前記の景明義記と共に古逸疏として珍重すべきものである。北周建德三年(五七四)釋道二敎を廢し沙門道士二百餘萬人を還俗させたといふ周武の破佛は、この義記の筆寫されてから十餘年後の出來事であつた。

東域傳燈目錄や諸宗敎藏錄などに依ると、道液が著はした維摩疏として、淨名經關中疏釋批二卷、關中集解四卷、淨名經關中疏四卷(具云集解關中疏)の名を列ねて、二卷と四卷との兩疏があつたことを傳へてゐるが、何れも久しく逸失してゐた。然るにスタイン本にもペリオ本にもこの道液の維摩疏が出て來た。その寫本の點數の多い處からすると燉煌邊では餘程行はれたもののやうである。

淨名經集解關中疏卷上　京資聖寺沙門道液集　(7-I,II)

始めに道液の序があつて、その文中、「干時上元元年(七六〇)歲次困頓(庚子)」とあるから、先づその著作年代が判然してゐる。次に僧肇の序を置き、注維摩に基いて維摩經を注釋したものである。日本でも大和多武峯談山神社藏本、平安時代筆寫の注維摩は維摩經集解となつてゐるから、集解は注維摩を指したものである。それからスタイン本にもペリオ本にも釋肇序略分、維摩疏釋前小序抄といふのがあるが、釋前

小序抄はこの道液疏の序分の解釋で、釋肇序略分の方は僧肇の序の注釋である。

淨名經關中疏卷上　沙門道液撰集　(7-III)

淨名經關中疏卷下　資聖寺沙門道液述　(8-I)

も同じく道液のもので、卷上の後記によると唐の大曆七年(七七二)三月、體清が維摩經を講じた際にこの關中疏を寫し、それから大曆(?)辰年(七七六)九月、俗弟子索遊巖が當時大蕃(西藏)の管轄にあつた沙州の普光寺尼僧普意のために轉寫したといふ奥書が附いてゐる。

淨名經關中釋抄卷上　道液撰集　(7-IV)

淨名經關中釋批卷上　(8-II)

この二つは同一のもので、東域傳燈目錄に淨名經關中疏釋批二卷とあるのがこれであらう。要するに日本の古い目錄に載つてゐて久しく散佚した道液の二種の維摩疏が現に出土本中にあることになつた。

釋肇序略分

僧肇の注維摩十卷の序文を解釋したもので、首部を缺いた斷篇では序文の一部の釋文しか殘つてゐないが、「余以大歷二年(七六七)春正月、於資聖寺、傳經之次紀其所聞、以補多忘、庶來悟義伯無消斐然矣、崇福寺沙門體清記」とあるに依りて、體清の集記たることがわかる。これが古目錄に崇福疏といつたり、西崇福寺沙門述六卷疏といふものに關係の有無は別問題として體清の釋肇序分は未傳である。

維摩疏釋前小序抄　(8-IV)

これは前に述べた通り道液の序の注釋であつて、ペリオ本には「余永泰二年(七六六)時居資聖、傳經之暇命筆眞書、自爲補其闕遺、豈敢傳諸母事」との後記がある。尙ペリオ本には、釋前小序抄と釋肇序略分と一緒になつてゐるものがあるから、この二つは道液疏の始めにあつた二つの序分を注釋したものである。

一體有題失題の維摩經疏の殘卷或は斷篇はスタイン本ペリオ本と合せると三十幾點もあつて非常に多いから、詳しいことは別篇に讓るとして、ペリオ本には六卷疏の殘卷もあるし、スタイン本には維摩提文書や維摩五更轉などもあるから、燉煌維摩變相と相俟つて維摩經が如何に盛んに行はれたかがわかる。

勝鬘義記一卷　(9,10,11)

首部闕、尾題の下に「慧掌蘊　正始元年二月十四日寫訖　用紙十一張　寶獻共玄濟上人校了」とあり、此の義記は北魏正始元年(五〇四)に筆寫されたもので、現存支那撰述の勝鬘經疏中では最古のものである。卽ち現存支那撰述中の慧遠(淨影)の義記、吉藏の寶窟、慈恩の述記に非ざるは勿論、諸勝鬘經疏中に引用されて斷片的に文句が殘つてゐる古注、僧覆の注勝鬘、梁林法師の一卷疏及び無名疏等の勝鬘經疏と比べて見ても、其の何れとも符合しない北魏の逸書で、少くとも現存最古の勝鬘經疏である。

晉から梁迄の間に勝鬘經疏を作つた學僧を高僧傳その他で探ると八人程あつたが、今日では其の大部分が傳つてゐないので、淨影、嘉祥の隋代の經疏が古いものとされてゐるが、此の義記は現存本の中では最古の位置を占むべきもので、從つてその解釋も注意すべきものが多い。勝鬘經第二、十大受章の解釋に就き嘉祥は五師の異說を擧げてゐるが燉煌義記の解釋はその何れとも合はない。凝然大德の詳玄記には その第四師が淨影で、第五師は聖德太子の勝鬘義疏の釋意に同じと云はれてゐるから、此の點で燉煌義記は太子の義記とも意見の異つてゐる事がわかる。それから攝受正法章の中に、經文に、相卽といふ言葉はないけれども意味の上から法と法、人と法との相卽を明す一段がある。昔から注釋家が法法相卽、人法相卽といふ科段を附してゐるが、北魏時代の燉煌義記に判然相卽といふ二字を使つてゐる。天台を中心として隋唐以後の佛教に常套語となつた相卽の文字を使つてをることなども注意すべき點と思はれる。全體として北魏時代の章疏は後代の樣な細釋は少く、釋例簡古であるが本義記の如きもその一例である。普寂德門和上の語に「寂竊謂、佛教東漸支那、從漢而歷六朝、學尙理趣知潤定水、通悟方等大宗者蓋多矣、但以章疏逸而不行於世、巨細巨知耳」と謂つてゐるのがよく當つてゐる。元錄十六年道空が吉藏の勝鬘寶窟を翻刻した際、千餘年を經て支那になくなつたものが日本に殘存してゐたといふことは稀有のことだと云つて居るが、この寶窟に先んずる事約百年前の義記が大英博物館に保存されてゐて、千四百數十年を經て今之を白寫眞に撮影するといふ事はそれにも勝る奇緣と謂はざるを得ない。ところがこの義記に次いで古い同じく勝鬘經の注釋である

照法師勝鬘經疏(失題)

といふのがある。その識語に「照法師疏」、「延昌四年五月廿三日於京承明寺寫勝鬘疏一部、高昌客道人得受所供養許」とあり、之を高昌客道人といふ點からすると、この延昌は北魏の延昌でなくて高昌趨氏の延昌であつたかも知れない。さうすると普通の支那の諸史に載せざる高昌年號の延昌で、北周の保定四年、陳の天嘉五年卽ち西紀の五六四年かも知れない。然し北魏の延昌四年(五一五)に現今の吐魯蕃卽ち高昌から來てゐた客道人得受(?)の供養したものかも知れない。どちらにしても前記の正始元年の最古の勝鬘義記に次ぐ古い勝鬘經疏である。卽ち淨影、嘉祥の經疏よりは古いもので前述最古の經疏の次に位するものである事は確かである。この他

(12-II)

挾注勝鬘經疏(失題)

がある。之は勝鬘經の經文の間に注釋を二行割註の形で挾んだもので矢張り未傳の經疏である。

出土本中、淨土敎關係の敎籍の中で、(一)經疏、(二)禮讃、(三)雜と分類すると、その經疏の中現在までに知られたものとしては、淨影慧遠の觀無量壽經疏と作者不明の觀無量壽經疏及無量壽經疏とがある。其の中無量壽經疏は六朝の古筆に屬する寫本で

无量壽義記下卷　比丘洪琇許　一校竟　(13. 14. 15.)

とあり、此の他二つの斷篇があつて一は

「猶如牛王无能勝故」　(15)

以下の經文を解釋したものと、更に他の一篇は

「或有金樹銀葉華果」　(16-II)

以下の經釋で、要するに此の三點は无量壽義記と云はれた同一疏の斷篇である。本疏は淨影、嘉祥、法位、玄一、憬興等の支那朝鮮に於ける現存の无量壽經疏とは全く符合しない未傳のものである。此の經疏と今まで知られた經疏との內容を比較すると甚だ興味の多いものがある。「邊地胎生」の往生を狐疑城と云つたり、「特留此經止住百歲」の文の解釋に像法の滅する時、龍王が一切經の文字を祗め盡すが、唯だ此の无量壽經の文字が百年間世に止ると云つたり、「著於无上下」は「无着於上下」と直すべきものだと云つたり、殊に注意すべきは「舊經本解云」として現行无量壽經以外の經があつたやうな口調を使つたり、兎に角種々の點で无量壽經疏の一異解を代表してゐる。

觀無量壽經疏に就いては作者不明の同經疏斷篇二つと淨影慧遠の義記とがある。

觀无量壽經義記一卷(失題)　(17, 18-I)

は現存諸觀經疏の何れとも符合せざる未傳の燉煌出土觀經疏である。觀經疏は古來頗る多い。義天錄には十五家を列擧し、永超錄には十二家十五部を列擧し、佛典章疏目錄には二十三家三十四部を列擧し、長西錄には四十五部六十七卷の書名を列ね、文雄の經籍錄には和漢合して百三十部を列擧してゐるが、その中で現存の支那製作觀經疏に對照するとその何れにも合はない。本疏の內容中、攝論別時意に關する意見、九品の位地、大觀二經の逆謗除取に關する論議等に於て、夫々他の經疏と異なる解釋をしてゐる。殊に燉煌には觀經變相が頗る多い。自分の調べた所では、燉煌千佛洞四百四十三窟の中で十八點の異なれる觀經變相があり、大英博物館所藏の變相に三點、印度デールヒ博物館所藏の變相にも數點がある。此の澤山な觀經變相は燉煌淨土敎が如何に隆盛を極めたかを語るものである。又本邦の當麻曼陀羅との關係、殊に唐の善導所圖の三百鋪の觀經變相との關係を見る上で重要な材料である。此の數多の觀經變相の解釋として燉煌地方に行はれた未傳の觀經疏のあるといふこ

とは當然の事であるが又頗る興味ある事である。此の燉煌の古疏が日本淨土敎家の間に色々問題となる深心の解釋に、「深心者徹於骨髓也」としてをる事なども面白いが、殊に九品の位地を上々品は十回向終心、下品の三人は凡夫としてゐる事なども稱名の解釋と共に興味あるものである。逆謗除取の問題に就いて本疏の解釋は唐懷感の群疑論に出づる十五家の異說の中、第九の闇師の解釋と同意で、已造逆未造逆の區別があるので一方で取り一方で除くのであると解釋してをる。次に

慧遠撰　无量壽觀經義記一卷　(16-I)

慧遠は燉煌の出身者中竺法護と相並んで著名な高僧であるが、善導以前の觀經疏として天台、嘉祥の經疏は燉煌出土品中に今まで見當らないが、此の慧遠の觀經疏のみは古くから行はれてゐたやうである。慧遠の生地が燉煌であつた關係から見ても、亦觀經變相の多かつた點から見ても興味ある研究資料である。之は未傳敎籍ではないが、現行の義疏二卷に比すると非常に異字異句が多いばかりでなく、无量壽觀經義記一卷の古體を保存してゐるので、校合本として參考とすべきものである。その他現行本と比して普通、誤寫が仲々多いが、然し現行疏で意味の通じないもの

が此の疏によつて判然するものもある。此の慧遠疏には他の一失題斷簡があつて、「憂惱由見如來般涅槃故」を初文としてゐる。

大乘四法經釋　世親菩薩釋

藏經中の四法經に三譯ある內、その何れとも符合しない四法經の釋で、寫本は題號の解釋で終つてゐるが、世親釋としてゐる。然るにスタイン本中更に

大乘四法經論○廣釋開決記一卷　(18-II)

がある。釋の內容又開決記との關係などに就いての詳しいことは略するが、兩者共に先づ未傳といふ點で珍らしいものである。

稻芋經疏(失題)　(19-II)

現存稻芋(了本生死)經四部、稻芋喩經一部の內、燉煌本失譯、佛說大乘稻芋經(大正藏七一三)の首部の注釋斷片で

稻芋經疏(失題)　(19-I)

も同じく燉煌本の中間の注釋斷簡である。

稻芋經隨聽手鏡記　(19-III)

も同じく經首「住王舍城」より經末までの注釋である。首部少闕尾題に依る。ペリオ本には隨聽手鏡記三部、隨聽疏決一部がある。又近時支那で刊行された燉煌本もある。(20)

金剛般若義記一卷

本義記は初めに長文の序があつて、義記としては僅に經首の解釋で破佚してゐる。「在舍婆提城」の引用句からすると、元魏菩提流支譯、金剛經の義記らしい。序文中に支那の注釋者は普通に序正流通の三分とするが、「外國法師」は本經を十二分に分ける旨を記してゐる。それは吉藏疏に出てゐる流支三藏の十二分釋と符合するもので、金剛經疏は大體什譯に依つてゐるが、現存流支譯の經疏だとすると珍らしいものである。

金剛般若經旨賛卷上　京西明道場沙門曇曠撰　(21)

金剛般若經旨賛卷下　(22)

金剛般若經旨賛卷下

後に起信論略述及び廣釋の下で述べる曇曠の金剛經疏で、上卷は完本下卷は兩本によりて略ぼ完本。曇曠は支那僧傳に逸名の法相學僧、しかも西明系のそれであつ

たが、その撰述の金剛經疏として面白い。勿論出土本の出る迄は全く未傳のもので
あつた。卷上には序分があつて、次に五門分別の賛釋を試みてゐる。卷下には「廣德
二年(七六四)六月五日釋普遵於沙州龍興寺寫訖」の後記があるから、唐の代宗の廣德時
代、燉煌での寫本である。

挾註金剛經(失題)　(23-I)

首部缺、什譯金剛經文に二行割註の挾註を加へたもので、現存六十餘部の金剛經
章疏中に符合するものがないから恐らく唐代の逸疏であつた。

金剛經疏(失題)　(23-III)

什譯金剛經の疏、首尾缺。肇注、吉藏、慧淨、智儼、窺基、慧能、宗密等の現存
疏と異つてゐるもので、「須菩提於意云何(中略)我得須陀含果不」以下經末に及んでゐる。

金剛般若經論上卷　(23-II)

首部缺、內容からすると元魏菩提流支譯、天親の金剛般若波羅密經論三卷中の上
卷で、「彼人依信心」の偈文の解釋の一部に始まり上卷末で終つてゐる。スタイン本に
は失題斷篇の金剛經疏類が可なりにある。そしてペリオ本には義琳述、建中四年寫、
金剛般若宣演、道氤の御註金剛般若波羅密宣演、金剛般若經做天親菩薩論賛略釋秦
本義記(崇聖寺知恩)、持誦金剛靈驗功德記などあり、日本や支那に散在してゐる燉煌
出土本にも珍しいものがある。

金剛經傳外傳卷下　(23-II)

も金剛經に關する一種の論著である。

般若波羅密多心經還源述一卷　(24-I)

は首部闕、玄奘譯心經の「行深般若波羅密多」以下經末迄を解釋せるもので、その末尾
に「一誦五百遍者、除九十五種邪道、善願從心度一切苦厄」などといつてゐる。

仁王護國般若波羅密經疏(失題)　(24-II)

も首部は破爛で尾題もないが、識語に「開皇十九年(五九九)六月二日抄寫訖」とあり、文
中「仁王護國般若波羅密」を解釋してゐるので、仁王經疏と推定したが、さて隋代の同
經疏としては、天台と嘉祥との二疏のみだから、それ等と對照したが全く未知の出
土疏である。

法華義記(失題)　道周集　(25,26)

首部闕、法華經藥草喩品から勸持品(持品)まで八品の注釋で、後記に「比丘惠恭許」「正始五年(五〇八)五月十日釋道周所集、在中原廣德寺」とあるから、北魏代の法華疏たることがわかる。法雲の義記と同じく中間に提婆品を入れてない。續藏經中、現存法華の章疏は六十八部もあるが、試みに北魏正始の年號から推してその前後に出た道生、法雲、吉藏、智顗の諸疏と對照したが全く符合しない。道周の何人かは判然しないが、法雲が四十二歳(五〇八)の時に道周といふ人の所集にかゝる北魏疏のあつたことは色々な意味で珍らしい。

法華義記第三　(27,28)

首部闕、化城喩品から從地涌出品迄の八品の注釋。尾題下に「比丘法順寫記也」とあり、北魏の筆躰で內容は前の道周集の法華義記と同本である。但し前は持品で終つてゐるがこの方は更に從地涌出品までの疏文を保存してゐる。卽ち前後を合せると藥草喩品から從地涌出品までの道周義記が現存してゐるわけで、その重複の部分は互に文字の出入がある。又この義記は恐らく四卷本であつたらしい。內容からすると道生や法雲との比較上、又は六種法師の說に對する論難などにも參考とすべきものがある。

法華經疏(失題)　(31-32)

妙法華經卷六隨喜功德品から卷末迄の疏文で、試に法雲の義記、吉藏の疏略、智顗の文句、窺基の玄贊を始め之と符合するものを見ない。

法華經疏(失題)　(33-I)

神力品から普賢品までの注疏であり、普門品重頌の釋を缺いてゐるのは法雲疏に同じである。

法華經疏(失題)　(33-II)

壽量品から常不輕品までの疏文である。法華玄贊に似てはゐるが同じではない。この外にも出土本中法華疏の斷簡(玄贊もあり)があるから、詳しいことは他篇に讓ることにする。

法華論一卷　(29,30)

藏經中に同じく天親の釋或は造と傳ふる法華論に二部あり、一は妙法蓮華經憂波提舍二卷、後魏の菩提留支共曇林等譯で、他は妙法蓮華經論優婆提舍一卷、元魏勒

那摩提共僧朗等譯である。そしてこの法華論一卷は首部少しく闕けてはゐるが、勒那摩提譯のそれに當る。然るに宋本麗本では一卷、元本明本では二卷になつてゐるが、出土本は一卷としてゐる。更に宋本麗本に比較すると最も克く麗本に似てゐるが、處々に異文異字があつて對校本として價値あるばかりでなく、法華論が同時に傳譯され乍ら二部となつた事情にも參考たるべきものと想はれる。

(34)

涅槃經疏(失題)

淨影慧遠の涅槃經義記十卷の斷篇で、同經師子吼菩薩品並に迦葉菩薩品の一部の疏文である。一躰燉煌出土本中、不思議と思はれる程、六朝から隋代にかけての著明な學僧の著述が割合に少ない中で、慧遠は燉煌人であつた關係からか、無量壽觀經義記一卷と共に、その涅槃經義記が傳はつてゐた。

(35-I)

涅槃經疏(失題)

首尾缺、北本涅槃經迦葉品、憍陳如品の一部の疏で、

(35-II)

涅槃經疏(失題)

も首尾破佚、同上梵行品の疏で、この他に首尾破爛の斷片だが、南本涅槃の注釋たる

(36-I)

涅槃經疏(失題)

もある。スタイン本中には尙ほ三四點の同經疏斷片がある。

(36-II)

溫室經疏　釋惠淨撰

出土本殘卷斷篇の多くは失題で偶々撰者の名があつても、高僧傳中の人が少い中に、本疏の撰者惠淨は、京師紀國寺の僧で、房玄齡などとも交りのあつた高僧で、續高僧傳卷三末にその詳傳があり、貞觀十九年(六四五)六十八才で歿した人である。惠淨は雜心、俱舍、法華、勝鬘、仁王、盂蘭盆、上下生、溫室諸經の「要纘」を出したことが高僧傳に出てゐるし、又東域傳燈目錄にも載つてゐるし、この疏は嘗て本邦にも傳へられたものであつたが現存しない。出土本では始めに序があり尾題も撰名もあり、現存としては藏經中に吉藏の義記一卷あるのみだから、新たに唐代の逸書が見出されたわけである。

(36-II)

六門陀羅尼經論廣釋一卷　尊者智威造

玄奘が貞觀十九年に譯した六門陀羅尼經論の注釋で、首部破爛、中間に六門陀羅

尼經論一卷の尾題があつて、次に「六門陀羅尼經論廣釋尊者智威造」の首題竝に撰者の名があり、そして尾題に同廣釋一卷となつてゐる。

(37-I)

薬師經疏(失題)

現存三藥師本願經中、隋達摩笈多譯藥師如來本願經文、「於其國中有二菩薩」(日光月光)以下の注釋で、首尾共に失題だがその跋文によると、撰者は慧觀で、慧觀が不治の病に罹りこの經文を信じてその疏を作つたといふのである。「慧觀、昔因問道得履京華、備踐講筵十有餘歲、遂逢永淳飢餒」とあるから、唐高宗永淳(六八二)頃の製疏であつたことがわかる。玄奘譯には太賢始め注釋があつたが笈多譯には珍らしい。淨土について細かな説明をしてゐるのも撰者に相應しいことであつた。

(37-II)

薬師經疏(失題)

これも失題殘卷で藥師本願經疏だが、嚴密に引用經文を對照すると、笈多譯にも玄奘譯にも合はない箇處がある。首部は缺けてるが第十二願文迄の解釋で破佚してゐる。佛十號の解釋中、多他阿伽度を如來、如去、如住と譯してゐる。

二、戒律部　六三—七七

(38)

菩薩瓔珞本業經疏(失題)

首尾破爛、大乘戒經たる姚秦竺佛念譯、瓔珞本業經の注釋で、梵網經には古來數多の注釋があるが、本經には少かつた。續藏經中に元曉の疏三卷が現存してゐるのみで義寂の疏二卷が夙に逸失してゐる。

(39, 40, 41, 88)

十誦比丘戒本(失題)

本寫本はスタイン氏蒐集出土本中で、年號を有つてゐる佛教寫本としては最古のものである。後記に「建初元年歲在乙巳、十二月五日戌時、比丘德祐、於敦煌城南受具戒、和上僧(法)性、戒師寶慧、敎師惠觀(?)、時同戒場者、道輔惠御等十二人、到夏安居寫到戒諷之趣、成具拙字而已、手拙用愧、見者但念其義、莫咲其字也、故記之」とあるが、この建初は西凉の建初元年、東晉の義熙元年(四〇五)に當り、成具の寫したもので、成具は字が拙いから義を念つて字を嗤笑するなとあるのも面白い。さて成具は誰人か判然しないが梁高僧傳、明律篇、僧隱傳の附見に出てゐる成具だとすると、成具律師の親筆となるから稀代の寶といつてよい。又本寫本は失題殘卷だがそ

の内容は十誦比丘戒本で藏外の逸典として羅什譯十誦比丘波羅提木叉戒本と別な、そして恐らくそれ以前のものと思はれる未傳の逸典である。從つて本寫本の音義譯中には、普通律藏の譯語は廣律も戒本も羯磨も、用語は大抵一定してゐる常例と異つてゐる事なども興味ある點で、支那に於ける傳律史上の一文獻と謂つてよい。

四分戒本疏卷第二　沙門慧述　(42-I, II, 43-I)

四分戒本疏卷第三　沙門慧述　(43-I, II)

二卷二本あり、一本は初部のみを存し他本は首部少闕。三卷も二本あり、一本は初部のみを存し他本は十三僧殘の初めより第十二までの疏文がある。ペリオ本に四分戒本疏卷第一(初缺)及び同卷第三(沙門慧述)があるから、大體初三卷が揃つてゐる。唐の定賓、道宣の戒本疏や法勵の律疏などに比較すると興味多い戒本疏である。そして諸四分比丘戒本中、何れの戒本に依つたかなどの詳しいことは別篇に讓る。

毗尼心一卷　(44)

首尾完。律の要項を擧げたもの。後記に「毗尼心一卷一十八紙」とあり。異本が英佛其の他にもあるから對校にも便宜である。卷首に「律中名敎有八種、學戒法第一、師徒法第二、衆僧法第三、行道懺悔法第四、行道修善法第五、發道資緣法第六、信施檀越法第七、護持法藏第八」とあるに依つて略ぼその内容がわかる。終末に「茲毗尼心者實曰靈腑寶藏也(中略)戒淨定淨、定淨惠淨、惠淨心淨、心淨土淨」とある。

三部律抄一卷　(45-I)

首部闕。尾題下の後記に「二年八月三日寫訖曠許」とあり、六朝寫本と想はれる。四分、十誦、僧祇の三部律よりの抄出に「釋曰」を試みたもので、初三品缺、布薩品第四から事七滅諍品第十六及び菩薩說淨文で終つてゐる。

四部律竝論要抄一卷　(45-II)

首部闕。同上尾題下に「歲次丙子年六月六日寫訖」とあり、これは四部の律に依つたものだが、分科も說明の仕方も三部律抄に似たもので、或部分は同文の箇所もある。

律抄第三卷手決一卷　(46-I)

首部闕。四波羅夷、十三僧殘、三十捨墮について、四分、五分、十誦、僧祇等を引用せる律抄第三卷である。

宗四分比丘隨門要(略)行儀　(46-II)

四分律に基きその行儀の要略を提示したもので、スタイン本中に二つの寫本がある。斷篇の始めに戒壇の圖があり、それから結戒場法、解界法、說戒法、安居法、受七日法、自恣法、分亡比丘輕物法、賞勞法、三人分亡比丘物法、展轉淨施法(中略)入衆五法はその要目である。

三、論疏部　七八——一〇二

瑜伽論第三十一、二、三、四卷手記　(47)

瑜伽論第二十卷分門記　(48)

古來瑜伽師地論百卷の章疏としては、印度撰述の論釋一卷(玄奘譯)を別として、和漢を合して四十餘部に達してゐるが、支那撰述として現存のものは、窺基の略纂十六卷、切章頌一卷、遁倫の記二十四卷、智周の疏四十卷(朝鮮本)のみである。然るにこの分門記及び手記はそれ等と別な瑜伽論の分科と注釋とであつて、これと同類の寫本が英國博物館にも十數部あり巴里國民圖書館にも數多の寫本があり、手記、隨聽手記、分門記などの名がついてゐる。更に大正五年末ペトログラド亞細亞博物館を訪ねた際、一本だけではあつたが、「瑜伽論二十卷隨聽手記　談迅福慧」の尾題を有する寫本を見たから、今やこの瑜伽論の章疏は各地に散在してゐることがわかる。スタイン本第四六三號の瑜伽論第三十三卷手記(鳴沙餘韻47の上段)の下に「談迅福慧隨聽」とあり、巴里寫本にも同樣の記事ある外、「大番國都統三藏法師法成述」、「國大德三藏法師法成述」とあり、講述者も隨聽者もわかつてゐる。特にこの注釋には蕃本卽ち西藏譯を參照してゐる點などからして甚だ珍らしいものである。

支那では六朝から隋にかけて眞諦三藏を中心として、攝論派といふ一學派を作つたが、その依るところは攝大乘論の本論釋論によつたものである。從つて僧傳や目錄を辿ると數多の注釋家があつた。嘗て自分は東洋學報で今日散逸した四十餘部の攝論章疏があつたらしい事を記したが、寫本は別として、版本で傳つてゐるものでは僅かに日本の普寂撰、略疏五卷のみである。支那出のものでは一部もない。勿論その中には傳文に明かに製作の事を記してゐないでも恐らく成書があつたと推測さるゝものをも列擧したが、兎に角數多の攝論章疏のあつたに拘らず今日現存せるものは一つもない。從つて攝論宗に關する研究資料が甚だ乏しい。玄奘譯の攝論の末

疏は別として、攝論家の攝論章疏が極めて重要な研究資料である。燉煌出土本の攝論疏がどれだけ攝論宗の研究に光を投ずるかは他篇に讓るとして、此處に攝論章疏のあることは注意すべきことである。

攝論章卷第一 (49-I)

本章はその後記に「仁壽元年八月廿八日瓜州崇敬寺沙彌善藏、在京辯才寺、寫攝論疏流通末代　比字校竟」とあり、隋の仁壽元年(六〇一)に沙彌の善藏が筆寫した攝論疏で、隋代の攝論の注釋として他の攝論疏寫本の筆寫年代が不明のものの中で、現存攝論章疏中では最古のものと謂つてよい。次に

攝大乘(論)疏卷第五 (50, 51)

之は眞諦譯攝大乘論釋論十五卷の疏で、現存の部は釋論の卷第三の最後の一節以下第四卷の終りに及んでゐる。

攝大乘論義記第七 (52, 53, 54-I)

之も眞諦譯攝論釋の疏で十五卷本の卷七、卷八の大部分卽ち「能入人章」の後半から殆んどその末尾に及んでゐる。前の攝論疏卷第五と今の攝論義記卷第七とは同一の疏で、內容として釋論以上に加ふる所が少いやうだが、本論釋論の引用文を現存本釋兩論と比べて見ると先づ語句に於て異つてゐる點が多い。それから

攝大乘論疏 (55)

本疏は同じく世親釋論により本論を注釋したもので、中に「馬鳴論」として阿梨耶、阿陀那の別名を解釋してゐる箇所などがある。

唯識三十論要釋

玄奘譯唯識三十論頌の要釋で、本文の引用からすると、「世間聖敎說有我法」の解釋以下論末に及んでゐる。惜しむらくは首部を少しく缺いてゐる。書題は尾題によつたものである。寫本は「同或執離心無別心所爲遮此等種々異執」を初めとしてゐる。兎に角、續藏中に現存するものと比較して見ると全く未傳の古疏である。

スタイン寫本中には大乘起信論の疏釋の殘卷斷篇が頗る多い中で曇曠撰の略述及び廣釋がある。

起信論略述卷上 (56, 57, 58, 59, 60, 61-I)

大乘起信論略述卷下 (61-II)

右の中、略述卷上の初めに「大乘起信論略述卷上沙門曇曠撰」とあり、論文の初めより「无明亦爾(中略)非心智滅」の論文で終り、識語に「寶應貳載玖月初、於沙州龍興寺寫記」とあり、唐代宗卽位の寶應二年(七六三)に曇曠が撰述したものである。略述卷下は「復次有四種至起不斷絕」以下の注釋であるが、首部だけで斷片になつてゐる。然し、スタイン本中、略述に屬する失題斷片が他にもある。その中に「僧法藏書記」の後記を有つてゐるものもある。それから

(62, 64-I.)

大乘起信論廣釋卷第三

(63)

大乘起信論廣釋卷第四

の中、廣釋卷第三は首題下に、「京西明道場沙門曇曠撰」とあり、論文「又以覺心源故名究意覺」より「何以故(中略)唯佛能知」までの解釋で尾題にも大乘起信論廣釋卷第三とある。之と別に同じ題號、撰號を有つてゐる寫本がある。だから廣釋の卷第三には完本が二本具つてゐる。次に廣釋卷第四は現存殘卷は首部少しく破爛してゐるが第三卷に續き、終りは「而有言說者(中略)不入實智故」に終つてゐる。起信論の初めの約三分の二で四卷の註釋になつてゐるから全體では六、七卷の廣釋であつたと想像される。大正五年末、ペトログラド(今のレーニングラド)の亞細亞博物館で、大乘起信論略述卷下　寶曆二年(八二五)十一月三日問法乳人翟寫」。とある寫本があつたから、或は他日これ等の起信論疏も完本を見る機會があるかも知れない。扨て、此の略述、廣釋の撰者曇曠はこの外に「金剛經旨贊」「大乘百法明門論開宗義決」「大乘百法明門論開宗義記」「大乘入道次第開決」などの未聞の逸書の著者で、支那の僧傳中に判然しないが西明系の學僧である。曾て大正十一年、望月信亨博士著「大乘起信論の研究」が公にさるゝ際、同書第二篇大乘起信論註釋書解題の下で古來の註釋疏百七十六部を解說された中に、新たにこの曇曠撰の略述、廣釋二疏を加へられた。その際、同博士より曇曠の傳に就いて尋ねられたので、續高僧傳第十六慧可傳の附見にある貞觀十六年洛州の會善寺に居た曇曠だらうと傳へたが、それは僧傳中に曇曠の名を見出した一人であつたからである。ところが大正十一年又啓明會の補助により第二回渡英の際、曇曠の自傳を發見した。それによると「余……初め本鄉に在りて俱舍を功識し、後、京鎬に遊んで起信、金剛、……を專らにす。始めて朔方に在りて金剛旨贊を選し、次に凉城に於て起信鎖文を造り、後に燉煌に於て入道次第開決を選し、百法論開宗義記

を選す、巨唐大曆九年歳次寅三月廿三日」とある。大曆九年(七七四)は貞觀十六年(六四二)と百三十餘年も距つてゐるから、慧可傳に載つてゐる曇曠とは全く別人である事がわかる。然しその著書からすると學僧であつたことは云ふまでもない。

起信論の末疏には以上の外數多の

起信論疏(失題)　(64-II)

がある。

因緣心釋論開決記一卷

スタイン本中に

因緣心論釋　龍猛菩薩造

又は「因緣心論訟龍猛作」と題せる一本があるが、この開決記はその註釋である。藏經中には龍猛或は龍樹の作たる因緣心論といふものがないから、その註釋も存在しない。ペリオ本にも因緣心論開決記がある。

大乘入道次第開決　京西明道場沙門曇曠撰

は智周撰、大乘入道次第の解疏である。智周は慈恩、淄州、撲揚と列べられて、慈恩宗第三祖の撲揚大師のことで、西明寺出身の曇曠の注釋といふところに特殊の興味が加はるわけである。又この曇曠は大乘百法明門論の注釋を書いてゐる。

大乘百法明門論開宗義記一卷　(66-II)

大乘百法明門論開宗義決　(66-I)

大乘百法明門論抄一卷　(66-IV, 67-I)

これ等は大體、天親造、玄奘譯の百法論の注釋とその注釋の注釋とである。この論には數多の末疏があるが、前述の通り曇曠は唐僧であつて、今藏經中に現存唐代の注釋としては窺基の論註一卷と普光の論疏二卷と從芳の顯幽鈔とのみだが、その何れでもない。兎に角、西明寺は唯識系統では慈恩派に對立した西明學派の圓測のゐた寺で、この西明學派には二三の俊才もゐたが、支那本土では全く慈恩派に壓倒されて仕舞つた。しかし朝鮮に太賢がゐたやうに、燉煌に曇曠がゐてその學派の餘喘を殘したといふことは興味あることである。又目錄や傳記からすると唐代には百法論の注釋家が約二十人もゐたのが現存は唯だ二三を留むるに過ぎない。然るにこの曇曠疏は嘗てその名を傳へられてゐないが、上述の年代からして先づ珍しいもの

である。

四、雜經疑僞　一〇三——一五三

无量壽宗要經　(68—I)

は現に梵語、于闐語、西藏語、漢譯本との四語で存在する經典で、漢譯中では宋法天譯、大乘聖无量壽決定光明王如來陀羅尼經の異譯である。漢譯に二種ある中の一で未傳の經典であつた。此の經は陀羅尼を主體とし、その陀羅尼は不空譯の成就妙法蓮華經觀智儀軌の眞言と同じで、燉煌本の宗要といふのは陀羅尼を指したものである。阿娑縛抄五十二の无量壽命決定如來法では釋迦か彌陀か不定であり、覺禪抄法華法では无量壽決定如來は多寶佛か釋迦佛か阿彌陀佛かの異說をあげてゐる。教義上では已に異譯の法天譯があつたのであるから、そしてその陀羅尼は法華儀軌に出てをるのであるから重要なものではないが、會々此の經の于闐語本が金剛經と共にスタイン氏によつて燉煌から將來されると英國のヘーンレ氏、獨逸のロイマン教授などの注意を引き、當時此の不明の死語が何か及び何と名付くべきかなどに就い

て歐洲の東洋學者に非常なセンセーションを起したものである。千九百十五年にヘーンレ氏の著述によつて于闐語、梵語、西藏語の三本對照の調査が發表されてゐる。此の經は經典書寫の功德を讃嘆してゐる爲め數多の寫本があり、大英博物館だけでも數百部の寫本を有し、其の他巴里にも、レーニングラドにも支那にも日本にも散在してゐる。

諸星母陀羅尼經、沙門法成於甘州修多寺譯　(68—II)

は古來の逸經であつた。譯者の法成は前の瑜伽論疏の法成で、支那の中土に傳へられなかつた人で燉煌寫本の中には此の他にも著述がある。

金有陀羅尼經

內容は別として經題だけからすると大變興味を引くやうな經典もある。

斯うした未傳の雜經と共に出土寫本には疑僞經が頗る多い。支那は文字の國、名教の國で、一度文字に表はれると其が不思議の力で人心を捉へる風がある。支那佛教が此の特性に應じてどうなつたかは別として、一見して佛經でない事がわかり、又內容も甚だ貧弱なものが民間に傳播力を持つてゐたと云ふ事は、此の名教の思想

によつたもので、支那佛教史上歴代經錄の出る度毎に疑僞經を除いて正經を保存する事に努めた。道安の經錄に二十六部三十卷の疑經の名目が載つてゐるのを始めとして六朝時代に盛に疑僞經が濫出し、正經對疑僞經の比率は隋代に十と一の割合、唐道宜時代に十五と一の割合、開元錄の時代に部數に於て五と一、卷數に於て七と一の割合をなしてをる程僞經が多かつた。だが今現存してゐるものは極めて僅かである。今これ等の僞經の中、經錄の中にその名の列ねられてゐるものと公に知られなかつたものとに分けられ、經錄に載つてゐた僞經だけでも頗る多い。隋衆經目錄に載つてゐる僞經中での燉煌出土本としては

救疾經 (70-I)
清淨莊嚴敬福經 (70-II)
天公經 (70-III)
咒魅經 (70-V)
妙法蓮華經度量天地品第廿九
普賢菩薩說此證明經
附證香火本因經 (74-VI)
大方廣華嚴十惡品經 (74-III)
首羅比丘經
太子讃經 (69-V)
救護身命濟人病苦厄經
大通方廣懺悔滅罪莊嚴成佛經 (69-VI)
道宜の大唐內典錄に載つてゐるものでは
法句經 (70-VI)
究竟大悲經
大威儀請問經
大周刊定錄に載つてゐるものでは
法王經 (71-V)
佛性海藏經 (69-III, IV)
佛爲心王菩薩說頭陀經 (74-V)

延壽命經　(71-III)
續命經
如來成道經
阿彌陀佛覺諸大衆觀身經　(71-I)
太子成道經
現報當受經　(71-II)
無量大慈敎經　(71-VI)
(大辯邪正法門經)
開元釋經錄では
禪門經　(72-I)
示所犯者瑜伽法鏡經　(72-II)
要行捨身經　(72-III)
三厨經　(73-I)
七千佛神符經

の名が載つてゐる。此の他經錄に判然しないもので
妙法蓮華經馬明菩薩品第三十　(70-IV)
僧伽和尙欲入涅槃說六度經　(73-II)
佛母經
佛說地藏菩薩經
閻羅王授記四衆逆修生七齊功德往生淨土經
佛說解百生怨家陀羅尼經
救諸衆生一切苦難經　(73-IV)
新菩薩經　(73-V)
讃僧功德經
觀音符印
等がある。
之等の僞經は夫々何等かの主張を以て書かれたものでその一々に就いては他篇に讓るが、全體から云ふと道敎の口吻を帶びたもので、佛敎の術語を用ひ乍ら往々道

教の意味を表はしたり、又道教の術語を用ひ乍ら佛教の意味に擬したものがあつたり、至道は虛無だと解釋したり、大乘は無乘だとしたり、華嚴經に十地を說くのに對して特別な十地を揭げて見たり、天尊と云ふ言葉を使つたり、種々雜多な異教思想を交へてゐるものが少くないが、道佛二教の混訛を傳へてゐるのが一特色で、それから支那民族の古今に一貫した思想なる福壽の祈願、殊に延命長壽をその經の功德としてゐるものが頗る多い。經題だけでは判然しないが、何時も長生延壽が多くの僞經の根柢をなしてゐる事がその第二特色で、次に之等の僞經の中に彌勒と阿彌陀との信仰が彼方此方に散見してゐると云ふ事が第三の特色で、つまり之を延命長壽から死後彼岸の理想鄕を兜率上生と極樂往生とに求むることになつたもので、支那の淨土教の發達の半面にはかうした民族思想と少なからざる關係を有つてゐたことを示してゐる。次にこれ等の僞經の中で、其の說教の時を佛の入涅槃時に置いたものが多いといふことが第四の特色で、これは大乘涅槃經の飜譯以來、法華佛教たる天台の起るまで盛に流行した涅槃經の影響の如何に大きかつたかを語つてゐるものである。之に加ふるに前述の名教思想も僞經の起つた一の特色として數ふべきである。

斯うして概括して見ると左程味が表はれないが、一々の僞經には皆何かの存在理由があつたもので、例へば示所犯者瑜伽法鏡經の如きは、三階僧の師利が三階教の教義を辯護する爲めに、玄奘譯の佛臨涅槃法住記の常施所問品及び像法決疑經などを取り交ぜて一經としたもので、開元錄に詳しく其の顚末が記されてゐる。この經などは爲めにする所あつて僞作したものであるが、前に出てゐた僞經を後になつて惡用した例もある。例へば證杳火本因經の如きは則天武后が武周革命を企てた時、その口實に惡用された經である。詳しくは拙著三階教之研究の附錄に述べてゐる通りである。

又僞經の中に法華や華嚴をその經題に使つてゐるものがある。華嚴十惡經、妙法蓮華經度量天地品などがその例であるが、妙法蓮華經度量天地品は色々な諸經錄にその名が出てゐり、そして第二十九品となつてゐるが、妙法蓮華經馬明菩薩品第三十といふのは、經錄には見付からない名である。法華は二十八品と定まつた後で第二十九品だの、又更に第三十品だのと云ふ僞經が僞の上に僞を重ねたことになつた

もので、固より道教の太上中道妙法蓮華經十卷十七品とは別なものである。要するに法華經に假託してかうした僞經を作り出したもので、つまり法華經の信仰の盛んなるにつれて現れたものである。又ペリオ本に法句經疏があるが、これは內典錄に出てゐる僞經法句經の疏である。

かうして有名な經や流行の佛、菩薩の名を借りて僞經を作り出すと同時に、有名な飜譯者の名を使つて僞作されたものもある。要行捨身經、大辯邪正法門經等は玄奘譯だと稱してゐるが、それは眞赤な嘘であるのもその一例である。以上に擧げたものは主として逸佚未詳の雜經疑僞を列ねたが、既傳僞經の異本もある。

佛名經卷第一

佛名經卷第十五 (95-1)

の如きがそれである。藏經中佛名經と稱せられるもの約二十數部ある中、卷數の多いのと誤謬の少くないのと凡俗の鄙語を交へてゐるのと及び寶達僞經を混じてゐるなどで、古來僞經とされた馬頭羅刹佛名經の異本である。經文中に「三部合卷」とあつて三部とは恐らく佛名經と寶達經と罪業報應敎化地獄經とを混合したことを指すものだらうと想はれるが、兎に角現流本と異つた三十卷或は十五卷佛名經の異本である。

五 史傳禮讃雜部 一五四—二〇九

楞伽師資記一卷 (75, 76-1)

首尾缺、始めに序文があり、次に「楞伽(師)資記一卷 東都沙門釋淨覺居太行山靈泉谷集」とあり、淨覺は楞伽經によりて禪家の師資相承を明かにし、第一祖を宋の求那跋陀羅とし、第二を魏の菩提達摩とし、第三を齊の惠可、第四を隋の僧璨、第五を唐の道信としてゐる。これは云ふまでもなく支那の第一祖を菩提達摩とする普通の說と異つてゐるもので、次の曆代法寶記は主としてこの淨覺の說に反對して書かれたものである。淨覺は本書で二入四行說を記し、「此四行是達摩禪師親說餘則弟子曇林記」といひ、又達摩に二種の達摩論の著書があつたことを記して、一は言行集成一卷、他は釋楞伽要義一卷十二三紙としてゐる。又更に當時三卷の達摩論があつたが淨覺は之を「文繁理散不堪行用」と評してゐる。本書は唐中宗頃に出來たものとして達

摩大師の研究に參考たるべき資料である。

(76-II)

曆代法寶記

スタイン本の首部不明の筒所をペリォ本で補足すると、本書は他に三名があつて「亦名師資血脈傳、亦名定是非摧邪顯正破壞一切心傳、亦名最上乘頓悟法門」となつてゐる。支那禪家の師資血脈心傳を述べたもので、先づ「有東都沙門淨覺師、是玉泉神秀禪師弟子、造楞伽師資血脈記一卷、接引宋朝求那跋陀羅三藏、爲第一祖、不知根由(中略)深亂學法」とあり、求那跋陀羅は譯經三藏で文字敎を傳へたものだから禪師でないとして、先きの楞伽師資記に反對し、默して心印を傳へた菩提達摩多羅禪師が支那の第一祖だといふのである。それから惠可、僧璨、道信、弘忍、惠能の諸祖以下諸禪師を傳へ、終りに「大曆保唐寺和上傳頓悟大乘禪門門人寫眞讃文幷序」が附いてゐる。

(77, 78-I)

無心論一卷　釋菩提達摩製

菩提達摩の著述の有無或は眞僞は姑く別問題として、前に述べた楞伽師資記も三部の達摩論があつたことを記してゐるが、圓珍求法入唐目錄にも達摩和上悟心論があ

つたやうに、遺著としてその名が傳へられてゐるものも今日は傳はつてゐないから、次の

(78-II)

南天竺菩提達摩禪師觀門

と共に達摩大師の名の下に書かれたものとして興味がある。

(78-III)

梁武問志公

は斷篇の假題で

(79-I)

淨住子卷第□八

梁の出三藏記集十二に齊竟陵文宣王法集錄序を擧げてゐるが、中に淨住子十卷右第一帙上、淨住子十卷右第二帙下、淨住子次門一卷の名はあつても今は傳はつてゐない。

(79-II)

大乘要語一卷

大乘の要偈及びその挾注で、禪家の語錄に類し、末尾に六祖法寶壇經中の「身是菩提樹」の偈を引いてゐる。

(79-III)

大乘經纂要義一卷

首部破爛、尾題の後に「壬寅年六月、大蕃國有讃普印信、幷此十善經本傳流諸州流行、讀誦後、八月十六日寫畢記」とある。斷篇に過ぎないが恐らく燉煌が西藏の勢力下にあつた時代の寫本だらう。

衆經要略文第五 (81-I)
法門名義集 (83-V)
に就いては略する。
禮文、印沙佛文 (80-III)
大悲啓請 (80-IV)
大乘淨土讃 (81-IV)
道安法師念佛讃文 (81-III)
大佛略懺一卷 (81-V)
大佛名懺悔略文卷下
大蕃沙州釋門教法和尚洪晋修功德記
行軍轉經文、行城文

索法號義曌諷誦文修功德記 (82-I)
消滅交念往生發願文 (82-II)
押坐文類 (82-III)
結壇歸願文
回向文
維摩經提文書
念佛偈讃
辭道場讃、諸經要略文 (79-IV)
禮懺文類

に就いては燉煌地方の行事としての行城や寺院に於ける諸法式、禮讃文、その他造像(印沙)のことなどに就いて興味あるものだが、煩はしいから略することにする。この內淨土禮讃については後で述べることにし、洪晋については Serindia の第四卷にその碑が載つてゐることだけをつけ加へて置く。

和菩薩戒文一本 (83-II)

入布薩堂說偈文　(81-II)
一行大師十世界地輪燈維摩五更轉
結壇散食回向發願文
地藏菩薩十齋日　(83-III)
大乘四齋日　(83-IV)
府君存惠傳　(84-III)
惠遠外傳　(84-I)
還魂記
大乘四無量安心入道法要略
大乘無生方便門　(85-IV)
論一卷　(85-III)
眞言要決卷第三　(86-I)
觀心論一卷
大乘廿二門本

大目犍連變文一卷　後梁貞明七年記　(86-II)
三界圖一卷　(86-III)
王梵志詩集竝序　(85-II)
泉州千佛新著諸祖頌　慧觀撰序明覺述　(85-I)

この內、惠遠外傳(假題)といふのは、廬山成道記が惠遠について奇怪な記事を傳へてゐるその僞傳の一部を詳にしてゐるものである。又眞言要決卷第三はその奥題に依つたもので、中間に辨僞篇第六の題號があつて佛教と儒道二教との關係を說いてゐる。但し眞言宗の著述ではない。それから觀心論一卷も藏經中にある天台大師の觀心論とは別なもので、大乘廿二問本は首部破爛、終りに「大乘廿二問本　丁卯年三月九日寫畢　比丘法燈書」とあり、內容は大乘の教義及び實修に關する二十二の問答で、寫本は第二問の後部から終末の第二十二問までを保存してゐる。第三問は「修身口意、從初至終、行行如何」で、それから佛陀論、菩薩論、修行論、如來藏論などを取扱つてゐる。第二十二問では「佛在世時、衆僧共行一法、乃佛滅後分爲四都不同、於四都中何是一法」といふのであつて、部派佛教の由來を說明してゐる。論一卷は禪

家の語錄類で、大目犍連變文一卷は「貞明七年(九二一)辛巳歲四月十六日淨土寺學郎薛安俊寫」の後記を有つた寫本で、泉州千佛新著諸祖頌は首題下に「終南山慧觀撰序」「明覺大師述」とあり、終りに「沙州三界寺沙門道眞記」とあり、西國二十八祖、唐土六祖師に對する偈讃である。

この他、雜類の中には多種多樣で一々擧げられないが、寺の會計帳などの中には、當時その寺に居た僧の國籍などに面白いのがある。或る斷片には「甘州來波斯僧」とか「漢僧三人于闐僧一人波羅門僧一人凉州僧一人共」などと記されてゐて、或る時代に燉煌地方には諸方から來てゐた僧侶の居たことを語つてゐるものもある。又後晉天福七年(九四二)壬寅歲十二月十日、判官が寺僧と共に、庫內に就いて寺の什物調べをした文書の斷片などもあるが、その內には長柄熟銅香爐、小銅師子、千佛經巾、銀泥盤など多數が記帳されてゐる。

以上に擧げたのは大體、未傳と古佚とを主としたが、これからは古經や稀覯についてその內の重なるものを擧げる。

一、古經題跋　二一〇—二八三

大體始めの方の年代順に配列した題跋によつて、西凉卽ち東晉から唐末五代頃迄の前後約一千年間の古い筆體を知ることが出來るが、同時に佛敎聖典史にも幾多の光りを投ずるものがある。

十誦比丘戒本　(88)

西凉建初元年(四〇五)十二月成具筆寫。この戒本は藏中になき異本で、スタイン本中有年號佛典寫本として最古のものであることは前に述べた通りである。

大般涅槃經卷第十一　(89-I)

梁天監五年(五〇六)七月譙良顒が亡父のために荆州竹林寺で敬造。

灾變品　(89-II)

北魏延昌二年(五一三)燉煌鎭經生○顒昌の寫經。樓炭經災變品、分卷現流本と異つてゐる。

誠實論卷第十四　(89-III)

北魏延昌元年(五一二)燉煌官經生劉廣周の寫經。

華嚴經卷第三　(89-IV)

北魏正光三年(五二二)比丘法定が亡兄維那慧超の追福のための寫經。

妙法蓮華經卷第十　(90-I)

西魏永興二年(五三二)弟子陳晏堆。

大般涅槃經卷十一　(90-II)

北周保定五年(五六五)比丘洪珍寫經、用紙十八張。

大般涅槃經卷十八　(90-III)

北周保定元年(五六一)張黛生敬寫。

大集經卷第十八　(90-IV)

隋開皇三年(五八三)采紹が亡考妣のための寫經。

大智度論第四十一　(91-I)

隋開皇十三年(五九三)李思賢敬寫。

華嚴經卷第九　(91-II)

隋開皇十七年(五九七)優婆夷袁敬造。

妙法蓮華經卷第三　(91-III)

隋大業四年(六〇八)敦煌郡旅師王師が亡妣のために敬造。

維摩經卷下　(92-I)

延壽十四年(六三七)寫。延壽は高昌麴氏の年號にしてその十四年は唐大宗貞觀十一年に當る。願主たる清信女は麴氏の一門で、父王は或は麴文泰を指すか。

妙法蓮華經卷第二　(92-II)

唐上元三年(六七六)揚文泰寫。校閲等當時の寫經の風を傳へてゐる。

妙法蓮華經卷第七　(92-III)

唐上元三年(六七六)張君徹が亡妹のために敬寫。

寶雨經卷第九　(93-I)

武周長壽二年(六九三)譯、懷義監譯、武周革命に關係ありし譯經。その顚末は三階教之研究に讓る。則天文字を使用してゐる。

妙法蓮華經第一　(93-II)

武周垂拱四年(六八八)跋。經文、跋文に則天文字を使用してゐる。

阿彌陀經 (93-III)

唐景龍三年(七〇九)清信女鄧氏の敬造。

阿彌陀經 (94-I)

唐開元八年(七二〇)孫思忠寫。

大乘起信論卷 (94-II)

唐天寶二年(七四三)超俗寺靈暉〇。

藥師瑠璃光如來本願功德經 (94-III)

唐廣德二年(七六四)賈崇俊寫。

(佛像)佛說佛名經卷第十五 (95-I)

後梁貞明六年(九二〇)敬寫。佛名經寫經二百八十八卷の內。

瑜伽師地論卷廿八 (95-II)

唐大中十一年(八五七)明照廳了記。

佛名經裏 (95-III)

後唐長興五年(九三四)蓮臺寺僧洪福寫。

(點本)妙法蓮華經 (96-I)

跋に初學者をして法華經の句文を明かならしめんがため、加點せし由を記せり。

大般涅槃經第三十五 (96-II)

比丘善慈所供養。

大般涅槃經第二十六 (96-III)

亡道人普惠寫、弟弘翊のための供養。

梵網經序 (97-I)

梵網經の研究に參考たるもの。

阿彌陀後文 (97-II)

阿彌陀經後文並に陀羅尼に參考たるもの。

佛說無量壽觀經一卷 (97-III)

沙門曇皎が敬寫千部中の一。

(佛像)妙法蓮華經普門品 (98-I)

大般涅槃經卷第二十三　(98-II)
疏文(保定元年)　(99-I)
佛說甚深大廻向經(開皇九年)　(99-II)
摩訶般若波羅密品第四　(99-III)
中阿銘經　(99-IV)
大般涅槃經卷第四(開皇八年)　(99-V)
妙法蓮華經卷第三(上元三年)　(99-VI)
增一阿含經　(99-VII)
孛經一卷　(99-VIII)
大般若經卷一百三　藏經印
千眼千臂觀世音陀羅尼經、伽梵達摩於于闐譯

跋文中には燉煌地方の歴史や民情に參考たるものも少くない。或は燉煌の治安を祈つたものとか遠行の子が早く歸ることを願つたものとか色々あるが、中には「祭驢文」と題して死んだ驢を祭る祭文などもある。

二、古寫稀覯　二八四—二八七、附一六六、一六七、一七九

茲には現に行はれてゐるが多かれ少かれ相異してゐる古寫本を列ねたが、淨土禮讃類は未傳と思はれるもの卽ち前の史傳禮讃雜部中に出陳した一部を附け加へて述べることにする。

先づ淨土禮讃類の中で曇鸞の讃阿彌陀佛偈は略論安樂淨土義と合本になつてゐて

讃阿彌陀佛偈竝論上卷　景雲二年三月十九日弟子張万及寫　(100)

とあり、現行讃阿彌陀佛偈は龍樹偈讃に出てゐる「願共諸衆生　往生安樂國　南無至心歸命禮」の文が各拜毎に附いてをり、又「哀愍覆護我」等の文もあるが、この景雲寫本にはそれがない。五十一偈を終へて「讃有一百九十五行　禮有五十一拜竟」と云つてゐる。兎に角、流行本は善導の六時禮讃の形式を混じ、此の寫本に比すると後代の添加あるを示してゐる。次に曇鸞の略論安樂淨土義が、單に「論」と稱せられ、又「安樂土義」と稱せられ、古來此の書はその題號の上から又その內容上から種々の議論があつたが、この景雲寫本によりて少くとも、略論安樂淨土義が日本での僞作であるとい

ふ説の誤りを正すことになる。支那で出來た淨土禮讃としては善導、法照、彥悰、慈愍、元照、其他數多あるが、出土本中

沙門善導願往生禮讃偈　(101-I)

があり、又法照の五會法事讃には略本と廣本とのある中で、本邦所傳の略本法事讃一卷と別な日本には未傳の廣本法事儀三卷が巴里國民圖書館にある。又慈愍の西方讃も巴里國民圖書館中にあるが、扨て善導の往生禮讃も現流本と衆諸經禮懺儀に載つてゐるものと比較して見ると處々異つてゐる點がある。要するに普通に知られてゐる淨土禮讃の異文又は古佚に就いても重要な寫本があるが、然し、普通に知られてゐる禮讃の外、燉煌地方に特有の禮讃と思はるゝものも少くない。

同會往極樂讃　五台山詩　(80-I)

の如き

淨土禮讃　(失題)　(80-II)

の如き

大乘淨土讃一本　(80-III)

の如きは皆淨土禮讃類である。

道安法師念佛讃文　(80-IV)

も題號の通り淨土讃の一種である。然しこの道安は彌天の道安でもなく、又二教論の著者の道安でもなく、高僧傳に知られない道安であつたやうである。

往生禮讃文一卷　十二光禮懺文　諸佛作梵　(101-II)

の中間題號を有する寫本中、この十二光禮懺文は龍樹の十二禮でもなく、又往生禮讃文も善導のそれと同じものでない。

淨土禮讃　(失題)　(101-II)

の如きも淨土禮讃の一でスタイン本の淨土禮讃にもかうして數多あるが、ペリオ本には更に多くの淨土禮讃がある。その中には研究上重要な資料たるものも少くない。

釋淨土群疑論　(失題)

懷感の群疑論で、次に述べるやうに三階敎籍が仲々澤山あるが、その攻擊をした本書が、巧みな草行書で傳へられてゐる。

菩薩戒本疏卷下

本文から推して義寂の菩薩戒本疏たることがわかる。草書が餘りに巧みに崩されてゐるので、尾題も撰名も判然してゐるのに撰者の第二字が讀めなかつたが、本文對照によりてそれが「釋氏沙門　義迹之造」であることがわかつた。それから異字對校本といふよりは全く異本と看做すべきは燉煌本六祖法寶壇經である。燉煌本の具題と編者とは

南宗頓教最上大乘摩訶般若波羅密經六祖惠能大師於韶州大梵寺施法壇經一卷
兼受無相戒弘法弟子法海集記

(102, 103)

となつてゐる。現行本(藏經本)は

六祖大師法寶壇經　風旛報恩光孝禪寺住持嗣祖比丘宗寶編

となつてゐて、前には古筠比丘德異撰の經序と宋の契嵩撰の經贊とがあり、後には門人法海等集の六祖大師緣記外記が附錄となつてゐる。これは勿論燉煌本にはない。先づ分量からすると燉煌本は現行本の約二分の一だし。編者は一方は六祖の弟子で天寶頃の唐の法海で、他方は六祖寂後約六百年の元の宗寶だし、又宗寶の跋(附錄)からすると、法寶壇經は元代に三種の異本があつて、「見三本不同、互有得失、其板亦已漫滅、因取其本校讎」して今の壇經を編成したものであるし、又現に本邦に一異本があるし、現行本は行由第一から附屬第十まで條章整然としてゐるが燉煌本には分科はないし、特に第七機緣は宗寶が「增入」したものであるし、少くとも第八以下は後人の加入らしいといふ說があり、大略外觀上から見ただけでも燉煌本は現行本の紛本であることがわかる。壇經についての眞作說、僞作說、改竄說は姑く別問題として兎に角、現行本となるまでに幾らかの壇經異本のあつた內で、燉煌本はその最も古い型を示してゐるやうに思はれる。同時に、宋代に盛になつた語錄の由來にも深い關係がある。內容上からの對比は別篇に讓るが、燉煌本六祖壇經はかうした各方面から見て支那禪宗史上の貴重なる研究資料である。

三、三階敎籍　二八八——二九六、別室出陳

三階敎籍中には開皇三年及び同七年の信行自らの遺文(傳道書簡)がある。それから本邦所傳の三階佛法四卷と全然異つた

四卷三階佛法

の卷二卷三の殘卷があり、更にペリオ本にはこの燉煌所傳の三階佛法の注釋たる三階佛法密記卷上(三卷中の第一卷)があり、これ等と相列んで組織的に教義を說明せる

對根起行法

があり、何れも三階教義の說開には重要闕くべからざるものである。此の他に三階教の禮懺文卽ち勤行式たる

七階佛名或は七階佛名經又は禮佛懺悔文　(101-III)

の如きは數點の異つた寫本がある。この三階教の禮懺儀は善導の六時禮讃と深い關係のあるもので、智昇は開元錄では三階教を異端扱ひしてゐるが、集諸經禮懺儀では三階宗祖信行の六時禮文を採錄してゐる。中には宋の開寶や太平興國の後記を持つてゐる寫本があるので、三階教の禮文は少くとも第十世紀末迄、燉煌地方に殘存してゐたことを證明してゐるものもある。又三階教史中、著しき事蹟としての、無盡藏院や百塔寺の由來を說明すべき、

無盡藏法略說

無盡藏法釋

のやうなものもあり、更に又三階教特有の教義たる、總ての人は可能としての佛たることを說いた

普法四佛

の斷片や、他に對しては普く敬ひ、自己には每に惡を認むる、所謂、普敬認惡の語あるによりて、三階教籍たるを語れる

如來身藏論

の如き奇題の斷片もある。それから三階教籍の目錄として三階僧の手に成つた人集錄都目といふのがペリオ本中にある。同じくペリオ本の中に、龍藏內無名經論律と題せる紙片があつて、その內には、從來全く知られず、又今日尙未だ發見されないが、恐らく四卷三階佛法の注釋だらうと想像さるゝ、私記錄一卷や又私記錄第三五などと云ふのがある。この外更に三階佛法密記上中下三卷や、人集錄十二段一陪顚倒法一卷のやうに、開元錄、貞元錄の著者は勿論、抑も上に述べた人集錄都目の著者すらも、未だ曾て傳へてゐない書名をすら載せてゐる。だから三階教籍は開元、

貞元兩錄に傳へた以外にもまだあつたものである。從つて又三階敎秘史の一たる三階僧、師利の僞經製作の一件なども、その根本資料たる

示所犯者瑜伽法鏡經

の現出によりて、前に僞經のところでも述べたやうに景龍三年(七〇七)から一千三百餘年を隔てた今日になつて、その馬脚を露顯するやうなことも起つて來た。

四、摩尼敎敎籍　二九七、二九八、別室出陳

(104-I)

下部讃一卷

首部闕、奥題に下部讃とあり、シリア語の漢音譯と漢語偈文とから成り、摩尼敎の禮讃文である。外題に「往西天求法沙門智嚴西傳記寫下卷」とあるのは後人の加筆で、後記に依ると摩尼僧道明の翻譯たることがわかる。偈讃の項目は

讃夷數文、歎無常文末思信法王爲暴君所逼因卽製之、普啓讃文末夜暮闍作、次偈宜從依梵、稱讃忙儞具智王諸暮闍作、一者明尊那羅延佛作、收食單偈大明使釋、收食單偈第三疊、初聲賢文夷數作義理幽玄從宜依梵、歎諸護法明使文子黑哆忙儞

電達作有三疊、歎諸護法明使文第二疊、歎諸護明使文第三疊。

で、第一の讃夷數文中の夷數とはエス(耶蘇)の音譯で、摩尼敎では基督敎の夷數と摩尼敎の夷數とを別にしてゐるが、こゝでは勿論摩尼敎の夷數である。本斷篇は Serindia にも書かれてゐるが、一九一六年夏、英國博物館のスタイン蒐集室で偶然に見出したものである。

(140-II)

摩尼光佛敎法儀略一卷

これは摩尼敎の法儀を書いたもので、後半部はこの寫本の發見される前既にペリオ氏の報告があつた。上記首題の次に「開元十九年六月八日大德拂多誕奉詔集賢院譯」とあり、現存の部はスタイン本ペリオ本を合せて

託化國土名號宗敎第一、形相儀第二、經圖儀第三、五級儀第四、寺宇儀第五、出家儀第六

だけで破佚してゐるが、摩尼敎特に支那に於ける同敎の研究上重要な資料である。

以上、大略古寫本の價値及び特質を申上げまして講演を終ることに致します。

大正十四年四月十九日東洋文庫で財團法人啓明會の第四回展覽會が開催された際、英國博物館藏燉煌出土古寫佛典ロートグラフの出陣目錄たる拙編の略目(一〇頁)并に解說付、英國博物館所藏スタイン寫本寫眞帖(稀覯寫本十二點の一部分を五葉に影印)を頒布されたが、更に昭和四年十一月二十三日財團法人啓明會第七回展覽會が京都の家政高等女學校で開催された際、英國博物館藏燉煌出土未傳稀覯佛典白寫眞出陣略目(三〇頁)が領分された。右兩回共に自分が出陣寫本に就いての講演をしたが、第四回展覽會の講演(啓明會第十四回講演會)は夙に公表すべきであつたのに荏苒今日に及んだ。この點は全く自分の責任で先づ啓明會に對して深くその遲延の罪を謝する次第である。今第四回當時の舊速記に基き第七回展覽會の出陣を加へ、特にこれも啓明會の厚き御援助によつて英國博物館所藏支那古寫本の寫眞帖たる『鳴沙餘韻』(燉煌出土未傳古逸佛典開寶)の寫眞だけは既に公刊されたことであるから、多少當時の出陣順序を改めて成るべく多數の寫本を網羅して併せて啓明會への報告の意味をも兼ねて茲にこの講演速記を公にすることにする。これ等の寫本の内十數點に就いては、今迄に既に東西に亙つて有益なる研究成果の發表のあつたものもあるが、それ等はすべて別篇に讓ることにする。それからこれ等の寫本の大部分は近く大正大藏經刊行會で公刊することになつてゐる。(講演者しるす)

附錄

本會設立月日

大正七年八月八日

本會寄附行爲

第一章　總則

第一條　男爵牧野伸顯平山成信ハ赤星鐵馬ノ寄附ニ係ル金壹百萬圓ヲ以テ財團法人ヲ設立ス

第二條　本財團法人ハ啓明會ト稱ス

第三條　本會ハ公益ニ資スル爲メ左ノ事業ヲ行フヲ以テ目的トス

一　特殊ノ研究、調査、著作ヲ助成シ及發明發見ヲ奬勵スルコト

一　必要ニ依リ本會自カラ專門家ニ依囑シテ前項ノ事業ヲ爲スコト

一　外國ニ於ケル同種ノ事業ヲ紹介シ又ハ著作ヲ反譯スルコト

一　本會ノ目的遂行ノ爲メ必要ナル講演ヲ開キ又ハ出版ヲ爲スコト

第四條　本會ノ事務所ハ之ヲ東京市麴町區丸ノ内一丁目六番地壹ニ置ク

第五條　本會ノ事業年度ハ毎年一月一日ヲ以テ始マリ十二月三十一日ヲ以テ終ル但初年度ハ本會設立ノ日ヲ以テ始マル

第六條　本寄附行爲ノ條款ハ評議員會ノ決議ヲ經且主務大臣ノ認可ヲ受ケテ之ヲ變更スルコトヲ得

第二章　役員

第七條　本會ニ左ノ役員ヲ置ク

一　理事長　一名

一　理事　五名

内一名ヲ常務理事トス

一　評議員　十五名

第八條　理事長及理事ハ評議員會ノ決議ヲ以テ評議員中ヨリ之ヲ推薦ス但本會設立ノ際ハ寄附者之ヲ推薦ス

理事長ハ本會ヲ代表シ理事會及評議員會ノ議長ト爲ル

理事ハ會務ヲ掌理ス

第九條　初度ノ評議員ハ寄附者之ヲ推薦シ缺員ヲ生シタルトキハ評議員會ノ決議ヲ以テ補缺ヲ爲ス

評議員ハ重要ナル會務ヲ審議ス

第十條　理事長及理事ノ任期ハ三年トス但重任ヲ妨ケス

第十一條　本會ニ必要ナル事務員以下ハ理事長之ヲ任免ス

第三章　顧問及委員

第十二條　本會ニ顧問若干名ヲ置ク

顧問ハ評議員會ノ決議ヲ以テ之ヲ推薦ス但本會設立ノ際ハ寄附者之ヲ推薦ス

第十三條　顧問ハ本會ノ諮問ニ應シ且隨時理事會及評議員會ニ出席シテ意見ヲ開陳

ス

第十四條　本會ハ必要ニ應シ各種ノ委員ヲ置ク

委員ハ理事長之ヲ囑託ス

第四章　會議

第十五條　會議ヲ分チテ理事會及評議員會トス

第十六條　理事會ハ理事長隨時之ヲ召集ス

第十七條　理事會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルトキハ議長ノ表決ヲ以テ之ヲ決ス

第十八條　評議員會ハ通常及臨時トス

通常評議員會ハ毎年十二月及三月ヲ以テ理事長之ヲ召集シ本會ノ豫算及決算ヲ議定ス

臨時評議員會ハ理事長必要ニ應シ之ヲ召集ス

評議員五名以上ヨリ會議ノ目的タル事項ヲ示シテ請求スルトキハ臨時會ヲ召集ス

ルコトヲ要ス

第十九條　左ノ事項ハ評議員會ノ議ニ付スルヲ要ス

一　寄附行爲ノ變更

一　本會諸規則ノ制定變更

一　本會ニ於テ施行スヘキ事業ノ決定

一　理事長及顧問ノ推薦

一　資産管理ノ方法

一　其他理事會ニ於テ評議員會ノ決議ヲ要スト認メタル事項

第二十條　評議員會ノ議事ハ出席者ノ過半數ヲ以テ之ヲ決シ可否同數ナルトキハ議長ノ表決ヲ以テ之ヲ決ス但左ノ場合ニ於テハ評議員三分ノ二以上ノ出席アリ且出席者三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルコトヲ要ス

一　寄附行爲ノ變更

一　不動産ノ買入

一　理事長及理事ノ推薦

第五章　資　産

第二十一條　本會ノ資産ハ左ニ掲クルモノヲ以テ之ヲ組成ス

一　寄附財産金壹百萬圓

一　本會ノ事業又ハ財産ヨリ生スル收益

一　其他本會ニ於テ取得スル財産

第二十二條　本會ノ財産ハ國債證券又ハ確實ナル有價證券ヲ買入レ若クハ郵便官署又ハ確實ナル銀行ニ預ケ入ルルモノトス但特別ノ事情アル場合ニハ評議員會ノ決議ヲ經テ不動産ヲ買入ルルコトヲ得

第六章　會　計

第二十三條　本會ノ收支ハ毎事業年度ノ末日ヲ以テ之ヲ決算ス

第二十四條　本會ハ事業年度毎ニ財産目錄貸借對照表及事業報告書ヲ作リ決算ト共ニ評議員會ニ提出スヘシ

本會職員名簿

（イロハ順）

顧問	伯爵　牧野伸顯
理事長	侯爵　大久保利武
常務理事	鶴見左吉雄
理事	工學博士　子爵　大河内正敏
	串田萬藏
	山之内一次
	小松謙次郎

評議員

農學博士 法學博士 新渡戸稻造
工學博士 子爵 大河內正敏
侯爵 大久保利武
工學博士 高松豐吉
鶴見左吉雄
理學博士 長岡半太郎
串田萬藏
山之內一次
松浦鎭次郎
小松謙次郎
農學博士 古在由直
理學博士 櫻井錠二
文學博士 三上參次

委員

醫學博士 三宅秀
工學博士 塚本靖
工學博士 男爵 斯波忠三郎

本會出版物

一、依囑著述

(一)最近政治外交史 上、中、下、續 各五圓 富山房
(二)衞生長壽法 貳圓五拾錢 富山房

二、紀要

(一)往來物目錄(缺本) 文學博士 坪井九馬三著
(二)英國博物館所藏スタイン寫本寫眞帖 醫學博士 三宅秀著
(三)支那財政の眞相と其革新策に就て 理學博士 岡村金太郎編
(四)支那の關稅改正問題(缺本) 文學博士 矢吹慶輝編
經濟學博士 木村增太郎報告
經濟學博士 木村增太郎報告

(五)假名の研究(缺本)　文學博士　大矢透報告

(六)日本產業推移の經路　モーリス・ポーランド君報告摘要

(七)米國少年裁判所の研究　少年保護司　芳川顯雄報告

(八)世界大戰の獨逸教育に及ぼしたる影響　獨逸・フリッツ・ケルレルマン述

(九)支那と日本とに於ける古代と近代(缺本)　倫敦大學教授　アーノルド・ジエイ・トオインビー述

(一〇)佛、獨、白諸國農村の瞥見(三十錢)　駒澤大學教授　笠森傳繁報告

(一一)量子論諸問題(八十錢)　理學博士　仁科芳雄譯述

三、講演集

(一)〔法律上より見たる國際聯盟〕〔經濟方面より見たる國際聯盟〕(缺本)　法學博士　山川瑞夫　日銀理事　深井英五

(二)獨逸の近況(缺本)　文學博士　高楠順次郎

(三)露國の最近社會變動の經過及因由(缺本)　東大助教授　今井時郎

(四)スタイン氏發見の燉煌畫に就きて(缺本)　文學博士　瀧精一

(五)朝鮮李王家の古樂舞(缺本)　理學博士　田邊尚雄

(六)米國々民性の研究と日米關係の新生面(缺本)　文學博士　鶴見祐輔

(七)支那佛教史蹟踏査報告(缺本)　文學博士　常盤大定

(八)臺灣琉球の音樂に就きて(缺本)　理學博士　田邊尚雄

(九)往來物(德川時代庶民教育資料)に就きて(缺本)　理學博士　岡村金太郎

(一〇)歐洲の近況(缺本)　商工省書記官　石井銀彌

(一一)建築の理想と實際(缺本)　工學博士　伊東忠太

(一二)波斯、メソポタミヤ方面視察談(缺本)　總領事　縫田榮四郎

(一三)ブラジル移民に就きて　社會局書記官　富田愛次郎

(一四)燉煌出土古寫本佛典に就きて(二十五錢)　文學博士　矢吹慶輝

(一五)琉球史概觀　文學士　東恩納寬惇

(一五)南島研究の現狀　東朝顧問　柳田國男

(一五)古琉球の歌謠に就きて　文學士　伊波普猷

(一五)琉球美術工藝に就きて　工學博士　鎌倉芳太郎

(一五)琉球藝術の本質　工學博士　伊東忠太

(一五)琉球の音樂に就きて　山內盛彬

(一六) 新土耳古國の建設
土耳古の經濟事情 (缺本)
前特命全權大使 内田定槌
土耳古代理大使 フールーシ・フユアド・ベー

(一七) 海外企業に就きて
貴族院議員 藤山雷太

(一八) 眼前の異人種問題
東朝顧問 柳田國男
アイヌ研究の現狀
東京帝大講師 金田一京助
アイヌの生活と博物館のアイヌ品陳列棚
理學博士 八田三郎
白老コタンアイヌの生活 (活動寫眞)
同 上 八田三郎
アイヌ生活の變遷
十勝アイヌ 伏根弘三
アイヌ語の本質
神學博士 ヂョン・バチラー
(缺本)

(一九) 我が國の古舞古樂に就きて
文學博士 高野辰之

(二〇) 歐洲に於ける勞働問題の趨勢
前國際勞働理事會代表 前田多門

(二一) 支那と外國
文學博士 坪井久馬三
支那の帝政と共和政
文學博士 矢野仁一

(二二) 獨逸の近況
老川茂信

(二三) 支那最近の政情
元湖廣新報社長 笹川潔

(二四) 國際經濟會議に就きて (缺本)
前國際經濟會議代表 志立鐵次郎

(二五) 滿蒙に於ける人類學上の研究に就きて
文學博士 鳥居龍藏

(二六) 日本の立場より見たる西洋美術
東京美術學校教授 矢代幸雄

(二七) 南洋に於ける日本關係史料遺跡に就きて
文學博士 黑板勝美
工學博士 伊東忠太

(二八) 東洋藝術の系統
琉球染色に就きて
鎌倉芳太郎

(二九) 朝鮮陶器に就きて
文學博士 矢吹慶輝
燉煌出土品に就きて
東京美術學校教授 倉橋藤治郎

(三〇) 西洋美術に於ける東洋的要素
文學博士 矢代幸雄

(三一) ペルシャ旅行談
貴族院議員 男爵 黑板勝美

(三二) 歐米視察談
特命全權公使 藤村義朗

(三三) 希臘事情
經濟學博士 川島信太郎

(三四) 滿蒙の經濟的價値
木村增太郎
軍縮會議の開かるゝに臨みて
海軍少將 南郷次郎

(三六)産業の合理化　商工省工務局長　吉野信次

(三七)最近の獨逸　駐獨特命全權大使法學博士　長岡春一

(三八)歐洲勞働運動の趨勢と失業問題　內務省社會局勞働部長　前國際勞働會議政府代表　富田愛次郎

(三九)航空研究の最近の情況　東京帝大教授航空研究所長工學博士男爵　斯波忠三郎

(三九)ペルシャを中心としたる西方亞細亞の美術(廿五錢)　東京美術學校助教授美術研究所々員　青山新

(四〇)歐米諸國補習教育の近況と我國教育制度の改善(廿錢)　橫濱高等商業學校長　田尻常雄

(四一)支那建築と其の裝飾　東京帝國大學名譽教授工學博士　伊東忠太

(四一)支那陶器の鑑賞　國寶保存會委員　奧田誠一

(四二)支那漆藝の發達とその趣味　東京美術學校教授　六角紫水

(四三)支那金工に就て　帝國美術院會員　香取秀眞

(四三)支那文樣の特質　東京高等工藝學校長　安田祿造

(四四)支那國民性とその染織　東京高等工藝學校教授　鹿島英二

(四四)支那の瓦塼　東京帝國大學名譽教授工學博士　關野貞

(四四)支那工藝に關する文獻　東京美術學校助教授　田邊孝次

(四四)東洋文化の世界的意義　(貳拾五錢)　金雞學院學監　安岡正篤

(四六)金本位の作用、殊に金融との關係　(貳拾五錢)　東京帝國大學名譽教授法學博士　山崎覺次郎

補助成績出版物

(一)本朝文粹註釋　上下　京都　內外出版會社　柿村重松

(二)三階教の研究　十八圓　岩波書店　文學博士　矢吹慶輝

(三)瓜哇史　三圓五十錢　岩波書店　松岡靜雄

(四)古語拾遺(英文)　二圓　明治聖德記念學會　文學博士　加藤玄智　星野日子四郎

(五)校本萬葉集　文學博士　佐々木信綱

(六)更科日記錯簡考　三圓　目黑書店　東京高等師範學校教授　玉井幸助

(七)日華大辭典　十圓(縮刷)　京都　內外出版會社　服部操

(八)西日辭典　四圓　右文社出版部　日墨協同會社

(九)アイヌ語辭典　十二圓　教文館　神學博士　ジョン、バチラー

(一〇)支那財政論　六圓五十錢　大阪屋號書店　經濟學博士　木村增太郎

(一一)大唐西域記ニ記セル東南印度諸國ノ研究　六圓　森江書店　文學士　高桑駒吉

(一二)經濟上ヨリ觀タル蘭領東印度　五圓五十錢　財政經濟學會　增井貞吉

(一三)德川制度史料　十圓　六合館　小野清

(一四)蠑螈と山椒魚　十圓　丸善書店　田子勝彌

(一五)アイヌ敍事詩ユーカラの研究　二十五圓　東洋文庫　東京帝大助教授　金田一京助

(一六)畫の教育學　三圓八十錢　刀江書院　畫家　上阪雅之助

(一七)百世の師・孔子　一圓二十錢　玄黃社　貴族院議員　赤池濃

(一八)續日本名家四書註釋全書　論語解、學庸篇　讀孟叢鈔　東洋圖書刊行會　東洋大學講師　關儀一郎

(一九)サンドロ・ボティチエリー　約二十五圓　メディシイ・ソサイエテー　東京美術學校教授　矢代幸雄

(二〇)日本その日〳〵　上・下共三圓　科學智識普及會　石川欣一

(二一)校本延喜式　上・下各九圓　大岡書店　皇典講究所

(二二)後法興院記　上・下各四圓　至文堂　文學博士　平泉澄

(二三)梵文金光明最勝王經　十圓　京都　東方佛教協會　泉芳璟

(二四)朝鮮禪敎史　五圓　春秋社　文學博士　忽滑谷快天

(二五)亞富汗斯坦　三圓八十錢　東亞同文會　田鍋安之助

(二六)工業史　明治　化學工業篇、造船篇、鐵道篇　建築篇、電氣篇、土木篇　火兵・鐵鋼篇、鑛業篇　機械・地學篇、提要索引　壹百四十五圓　日本工學會　編纂委員長　工學博士　田邊朔郎

(二七)政教より觀たる論語新釋　三圓　啓明會　早稻田大學出版部　貴族院議員　赤池濃

(二八)日本產蛙總說　十八圓　岩波書店　理學博士　岡田彌一郎

(二九)播磨風土記新考　七圓五十錢　大岡山書店　宮中顧問官　井上通泰

(三〇)鳥類生態寫眞　上三圓五十錢　下四圓　三省堂　農學博士　內田清之助　下村兼二

(三一)ヒポクラテス全集　十八圓　岩波書店　醫學博士　今裕

(三二)內外蒙古の橫顏　二圓八十錢　海外社　畫家　玉井太市

(三三)繪畫の製作と鑑賞　本文共二十五圓　繪畫共　日本評論社　東京美術學校教授　和田英作　岩井尊人

(三四)鳴沙餘韻　六十圓　岩波書店　文學博士　矢吹慶輝

(三五)佛教大辭典　第一卷十八圓　佛教大辭典發行所　文學博士　望月信亨

(三六)近世地方經濟史料　全十卷　六十圓　龍吟社　農學博士　小野武夫

一八

昭和七年四月二十九日印刷
昭和七年五月三日發行

（定價貳拾五錢）

發行兼編輯者　笠森傳繁　東京府荏原郡馬込町小宿一〇五八ノ二
印刷者　松井方利　東京市深川區東大工町四十八番地
印刷所　東京印刷株式會社　東京市深川區東大工町四十八番地

發行所　財團法人　啓明會事務所（電話丸ノ内六八〇番）
東京市麴町區丸ノ内一丁目六番地壹
東京海上ビルディング五階五四六號

發賣所　北隆館（電話銀座一七八八、一七八九、一七九五、一七九六）
東京市京橋區銀座西五ノ五

14.5
30

終